

## シンポジウム「見たことのない図書館を考える」

### シンポジウムパネリスト紹介

佐藤：はじめに、パネリストとしてご登壇いただく皆様をご紹介します。

まず先ほどご講演いただきました長尾真先生に、引き続きシンポジウムにご参加いただきます。長尾先生、よろしくお願ひします。

続いて、同志社大学学習支援・教育開発センター事務長、井上真琴さんです。

井上：皆様よろしくお願ひいたします。

佐藤：井上さんは同志社大学に1986年からお勤めでいらっしやいまして、教務、それから図書館を経て、現在は学習支援・教育開発センターの事務長として同志社大学のラーニング・コモンズ設立の立役者として活躍されています。

最後に、国立国会図書館（NDL）の中山正樹さんです。

中山：中山と申します。

佐藤：中山さんはNDLの専門調査員・司書監でいらっしやいます。NDLの初代電子情報部長でいらっしやいまして、電子図書館サービスの企画、デジタルアーカイブの構築に携わっていらっしやいました。現在の国会図書館サーチ（NDLサーチ）の開発の取りまとめを行われた責任者でもいらっしやいます。

皆さん、本日はどうぞよろしくお願ひいたします。



当日の様子。

左から中山正樹、井上真琴、長尾真、佐藤翔（敬称略）

## シンポジウム趣旨説明

佐藤：司会からシンポジウムの趣旨を簡単に説明いたします。

今回のシンポジウムは『見たことのない図書館』を考える』というタイトルでお送りしております。同志社大学では2015年4月から、総合政策科学研究科総合政策科学専攻の中に、図書館情報学コースを設置いたします。この図書館情報学コースでは『見たことのない図書館』を作ろう』というテーマを掲げておりまして、それにあわせる形で今回のシンポジウムのテーマを上げております。

「見たことのない図書館」と言いますと、お菓子でできた図書館や、空に浮かんでいる図書館とか、そういう奇抜な空想を考えるように聞こえるかも知れません。それはそれで面白いかもしれませんが、ここで言う「見たことのない」とはそういう意味ではありません。今すでに存在している新しい画期的な図書館であるとか、新サービスも、それが出来た時には、それはまだ誰も見たことのない図書館、あるいはサービスであったはずです。誰も見たことなかったもの、でもそれが必要であるとか、あるいは欲しい、見たい、と考えられた方がいたから作り出され、生まれてきたのが新しい図書館やサービスであるはずです。そういった意味では、長尾先生にご講演いただいたNDLの新たな取り組みであるとか、これから詳しくお話しいただく電子図書館あるいはデジタルアーカイブ関連の仕組みや、同志社大学のラーニング・コモンズといったものは、これから我々が作りたくと考えている「見たことのない図書館」の一つの形であると考えています。ここにいる皆さんはまさに「見たことのない図書館」を作られた方、ということにして、その皆さんと一緒にディスカッションをしながら、これからの「見たことのない図書館」、その図書館像であるとか、それを実際にどうやって作っていくことができるんだろうかということを考えていく、その機会としてこのシンポジウムを作っていければと考えております。

ディスカッションに入るに先立ちまして、シンポジウムからご登壇いただいているお二人から話題提供をいただきたいと思っております。最初に中山さん、よろしくお願い致します。

### 話題提供1 「見たことのない図書館」を考える 電子図書館事業20年を迎えた新たな方向性の模索

中山：NDLの中山です。このような場で錚々たるメンバーの中に参加させていただくことはとても光栄ですし、大変有難く思います。

## 自己紹介

これからご説明をするにあたって私の以前からの経歴も知っておいていただいた方が良いかと思い、多少は自己紹介させていただきます。

私が最初に入ったところは民間の電気機器メーカーです。そこで昔で言う EDP (Electronic data processing)、事務処理を機械化するシステム開発に携わってきました。

その後、情報処理推進機構 (IPA) に移って、最初にやったのがソフトウェアの生産性向上化事業です。そこでソフトウェアの開発ツール、共通的なワークステーション、共通的なオペレーティング・システム (OS)、今で言う Linux の原型となっている OS の開発に関わってきております。

IPA 時代に、IPA と NDL の共同事業、パイロット電子図書館事業や、公共図書館の総合目録ネットワークの担当をしていました。そこから NDL に移り、電子図書館事業や、館の情報システム全般に関わってきて、今に至っています。そういう意味ではデジタル化と情報システムをベースにしたことを一貫してやってきていまして、「効率化」という観点でものを見ています。電子図書館事業にしても、図書館システムにしても、いかにして利用者が効率的に使えるか、いかにしてそのシステムが効率的に開発できるかという観点で考えてきました。

## パイロット電子図書館プロジェクト (1994年)

最初に関わったパイロット電子図書館プロジェクトは、壮大な目標が掲げられた事業で、「21世紀の高度情報社会において、地球規模の知的財産を、誰でも容易に利用できるようにする」、「地球上の、広く分散して個々に収集・蓄積されている知的資源に、空間的・時間的制約を超えてアクセス可能とする環境を提供する」ための実証実験です。技術的にはレベルの高いことをやっているわけではなかったのですが、目標はこのように壮大でした。1994年の時点で、大きなことを掲げて、それから20年経った今、どこまでできているか、というのがこれからの議論に関わるかな、と思っています。

この事業は IPA にいた時にやってきたものですが、それが現在の NDL の近代デジタルライブラリー、貴重書デジタルライブラリー、ゆにかねっとのベースになっています。



NDL 電子図書館中期計画2004

私がNDLに入ってから2年目に、「電子図書館中期計画2004」というものが策定されました。この背景にあるのは政府のe-japan重点計画でして、国のデジタルアーカイブ構想、ジャパンウェブアーカイブ構想というものが掲げられていました。その趣旨に同期する形で、この中期計画2004が立てられました。

中期計画2004では、国としてのデジタルアーカイブの構築を目指しています。それぞれの機関でデジタルコンテンツを作成して、それらのコンテンツを分担してアーカイブする、そしてそれら全体がどこに保存されていても一元的に利用できる、検索できるようにしようということを、中期計画2004では目指しました。

(図1は) その当時構想していた電子図書館サービスの全体像です。右下の枠で囲まれた部分がNDLの担当部分です。枠の中のデジタルアーカイブのところでは、所蔵資料をデジタル化したライブラリ、それから著作単位の収集物を保存するシステムを作ると。それから、長尾前館長のご講演でもありましたが、インターネット情報の収集をする、と。それらをあわせて、「電子書庫」に入れていきます。

また、枠内の左の部分は当館の蔵書目録を提供するNDL-OPAC、さらにその左の部分はNDLではなく他の機関で提供しているアーカイブや目録で、それらをあわせて上のデジタルアーカイブポータルで見られるようにしよう、としています。さらに現在の

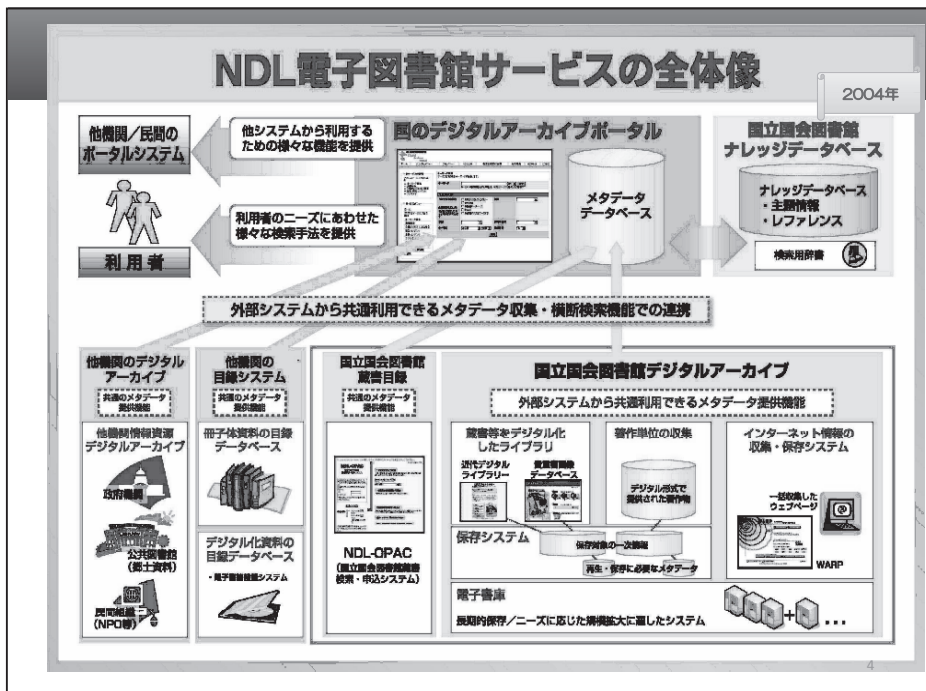


図1 NDL 電子図書館サービスの全体像2004

リサーチ・ナビに相当するような、ナレッジベースと連携して、それも見せていくと。GUI を使って、利用者のニーズにあわせて見えるようにしていこう、他のシステムが API など機械的に、自分のシステムの中で使えるようにしようということを、この時点で狙っていました。

### ポータルシステムの開発：デジタルアーカイブプロトタイプ

このうちデジタルアーカイブポータルシステム、検索システム部分の開発経緯ですが、まず2004年10月に開発を開始し、2005年に試験公開しました。そのポイントとして、こういったものを作る実証実験として、開発の妥当性を評価・検証するという。そしてオープンソースを基本的に適用していくこと、標準プロトコルを設定していこうということ、メタデータ・書誌データに関しても標準と思われるものを適用しようということ、自らが作るものと他機関が作っているサービスとをマッシュアップしていくことを考えていました。

コンテンツとしては、まず近代デジタルライブラリーのコンテンツ。そして近代デジタルライブラリーのコンテンツは画像データであるわけですが、そのテキスト版が青空文庫で出ているものについては、利用者が画像とテキストで見たい方を選べるようにしようということで、近代デジタルライブラリーと青空文庫をあわせて検索できるようにしようということ、基本的なスタートとしました。同時に、国立公文書館の情報も、NDL の持っているものと国立公文書館が持っているものが、時期的に重なっているものもあるのにそれぞれ分散しているということで、これも同時に検索できるようにしようとしてきました。

### PORTA

その実証実験の結果をふまえて、ご存知ないかも知れませんが、「PORTA」というものを開発しました。これは2005年に開発を開始し、2007年に正式に公開しました。PORTA は実用化のためのものですので、大量のデータを処理できるようにすること、拡張性等に配慮すること、今後5～10年使うことを想定して、先進的な技術を活用しようということを念頭に実施しました。

技術的には、当時図書館界ではあまり使われていなかった Solr 等も使っています。メタデータについても、単純にダブリンコアということではなくて、図書館界、その他の機関と合わせて、必要と思われるメタデータを加えています。特に意識したのは、このメタデータを他の機関が自由に使えるようにしようということで、API の仕様を公開して、それらを使ったシステムを開発してもらおうと考えていました。

## NDL サーチ

PORTA の開発がベースになりまして、現在の NDL サーチになっていきました。2009年の1月に三田図書館・情報学会の月例会で「PORTA の今後」というプレゼンをさせていただきまして、当時まだ「NDL サーチ」という名前はなかったのですが、「こういうものを作りたい」という話をしたところから始まりました。

システム自体は2012年の1月に正式公開しました。このシステムで特に意識しているのは、原田先生が行っているオープンソースの Next-L Enju をベースにして、それに Solr、それから分散処理システム Hadoop といったものを活用するということです。

## 知識情報基盤の構築

このほぼ同時期、2010年に国の総合科学技術会議から「科学技術に関する基本政策について」という答申が発表されました。これ（図2）はその中の「知識インフラ」と書かれたところです。ここでは文献から研究データまでの学術情報を統合して抽出・検索が可能なシステム、それを知識インフラとして、展開を図ることが提示されています。知識インフラとは情報資源を統合して検索・抽出することが可能な基盤で、国内の各機関が保有する情報を知識として集約して、新たな知識の創造を促進し、知識の集約・流通・活用・創造のサイクルの構築を目指すということが、この時点で示されています。

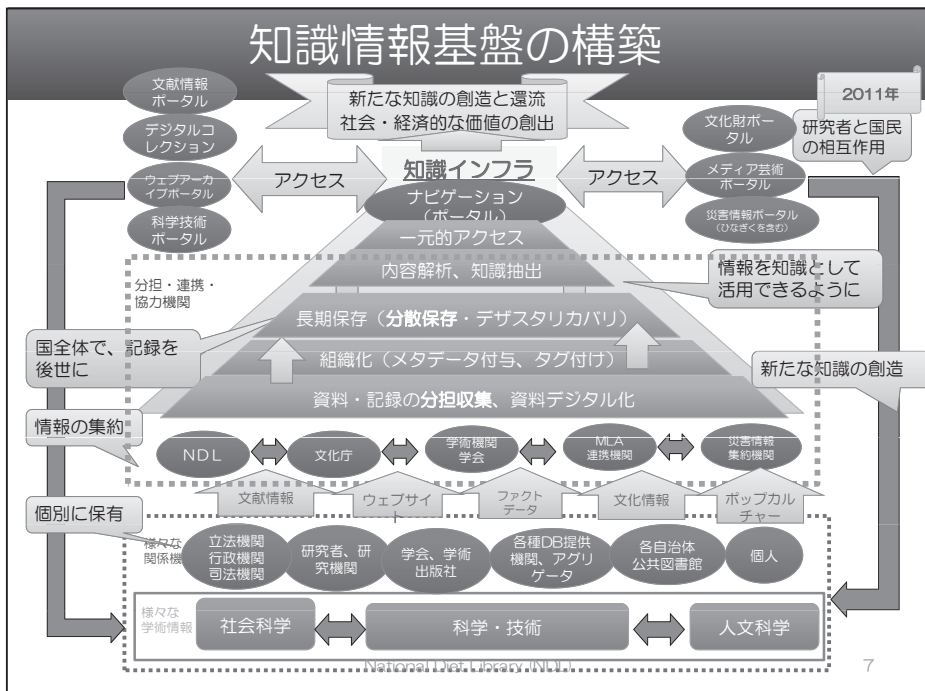


図2 知識情報基盤の構築

## NDL 東日本大震災アーカイブ

この知識インフラ構築の一環として、分野を特定した知識インフラの先行事例ということも意識して、NDL 東日本大震災アーカイブ、通称「ひなぎく」を開発しました。

これは震災に関するあらゆる記録・記憶を、それぞれの機関が分散して保存し、それを一元的に利用できるようにするというものです。先ほどの知識インフラのイメージの中では、特に今後の防災・減災に関連する情報を抽出して、絞り込んだかたちの知識インフラを構築することを進めてきたと言えます。

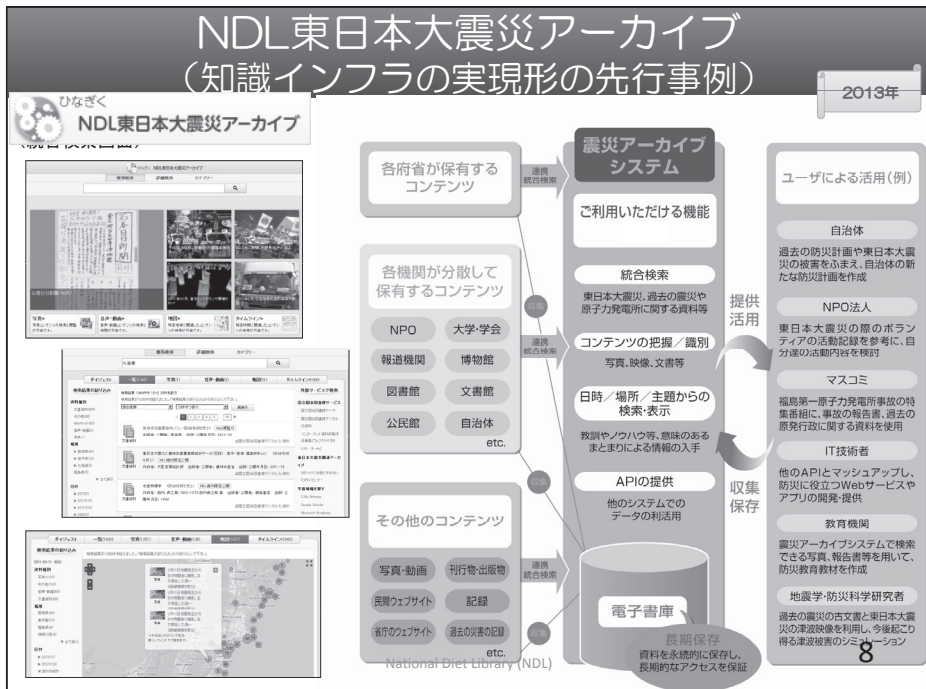


図3 NDL 東日本大震災アーカイブ

## ナショナル・アーカイブ関連の国の動き

今後のナショナル・アーカイブに関して国が様々なかたちで動いているのでそれを簡単に紹介しておきます。

まず「知的財産政策ビジョン」(2013年6月7日知的財産戦略本部) というもの、これは政府として今後10年を見据えて、知的財産に関して国の政策がどうあるべきだと、何を目指すべきだと示されたものです。それに基づいて今後10年の年度ごとのロードマップが作られているところで、特に押さえておくべきものです。

ナショナル・アーカイブに重要なポイントとして、オープンデータに関しても2013年に、「電子行政オープンデータ推進のためのロードマップ」が作られています。

## 電子書籍・文化資産の両議員連盟の動き

それから「電子書籍と出版文化の振興に関する議員連盟」というものと、「デジタル文化資産推進議員連盟」の2つがそれぞれ、特に今後の議論で注目すべきものとしてあります。

電子書籍に関しては、2013年6月から作られた議員連盟において、ナショナル・アーカイブを構築して、それとあわせて権利情報を管理するという仕組みが提言されています。その中の出版物の権利登録の制度、書誌情報を利用した著作物の特定の仕組みというところで、NDLが書誌データとアーカイブの役割の一角を担うべきだということが書かれています。この権利の登録の制度に基づいたところが、電子出版権の話につながっていきます。

デジタル文化資産に関しましては、2012年に議連が作られまして、その中で国立デジタル文化資産振興センターというものの設立構想が示されています。その2014年にまとめられた検討委員会報告の中では、センターの主管組織を作る、そこは産学官が連携して推進する、まず文化庁とNDLを含む形でスタートアップをしていって、今後の戦略等も立案していく、ということがうたわれています。

報告の中で、恒久保存基盤整備ということがうたわれていまして、ここでも様々な文化資源のデジタル化とそれらの蓄積、そのアーカイブの相互連携の基盤を整備するということが言われています。これに関しても、今まで行ってきた業務をベースにして、NDLが予算や人員の強化など、条件を整備することを前提に、この役を担うのが望ましいと示されています。

## 電子書籍分野のアーカイブ機能

(図4は)電子書籍分野のアーカイブ機能について、NDLと出版界がこういう役割分担が考えられないか、というイメージ図です。

この図では5つの機能を考えていました、出版界、NDLともにコンテンツを作るという部分がある。そして出版界としては、電子書籍出版支援組織が、それを提供用に一時的に収集する。それをNDLはオンライン資料として収集して、恒久的に保存する役割を持ちます。そしてそれらを提供する際には、NDLは所在情報の提供をするとともに、パブリックドメインと絶版の資料はNDLからコンテンツも出す役割を担う、出版界は有償の電子書籍等を出す役割を担う。利用者に向けては、有償のもの無償のもの合わせて届くような仕組みになっていったほうがいいのではないかと意識しています。

## 一元的ナショナル・アーカイブのイメージ

ここまでの文化財の話と電子書籍の話、これは別々に動いていたものです。NDLのアー



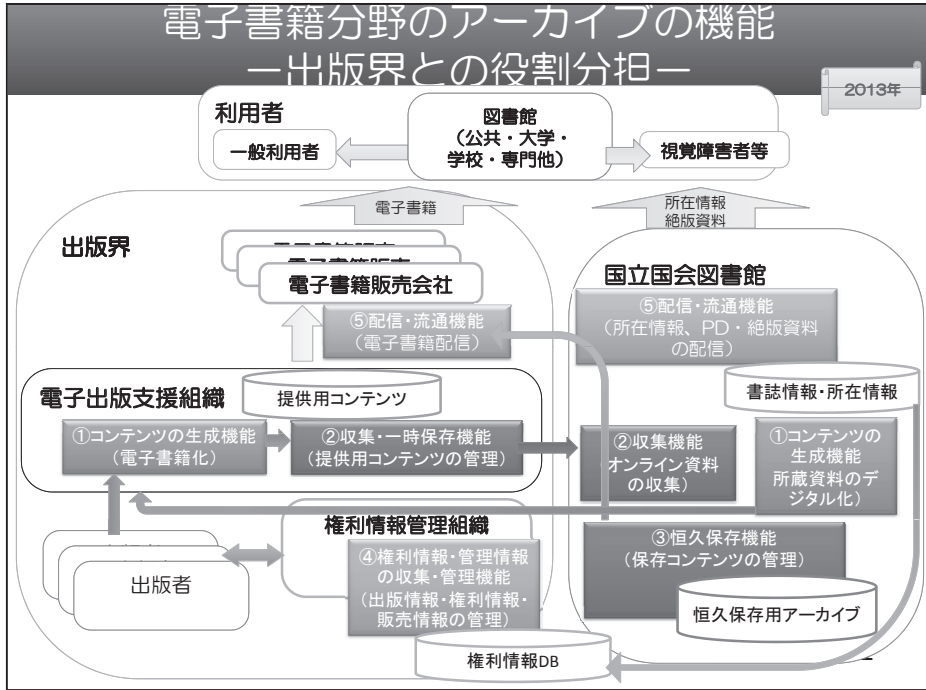


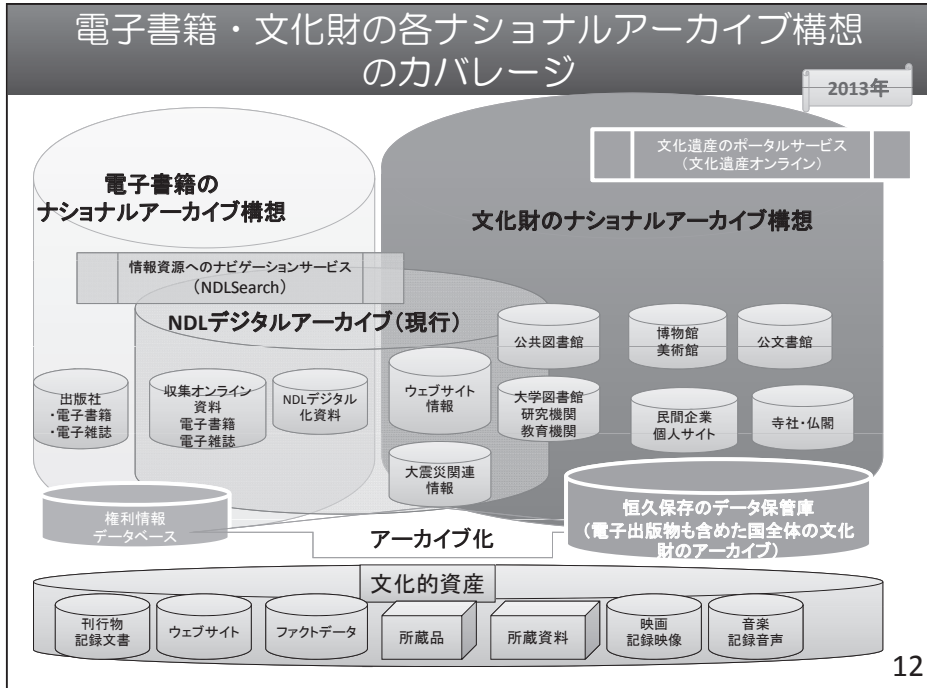
図4 電子書籍分野のアーカイブの機能

カイクは書籍に関する部分と、文化財といわれる部分と合わせて持っています。文化財のアーカイブ構想で対象となる文化資産、これには書籍、古典籍等も含めて文化財と呼ばれるもの、新しいものではポップカルチャー、サブカルチャーも含まれます。

(図5～7は) この2つの構想を合わせていく必要があるんじゃないかということで、電子書籍として作るアーカイブと文化財として作るアーカイブ、その他の大震災アーカイブのような減災・防災情報を扱っているもの、それらを合わせてひとつの仕組みとしてアーカイブしていき、それらが日本の文化として発信されること、それぞれの目的に応じたポータルが利用できる仕組みを作っていくべきではないかということイメージしたものです。

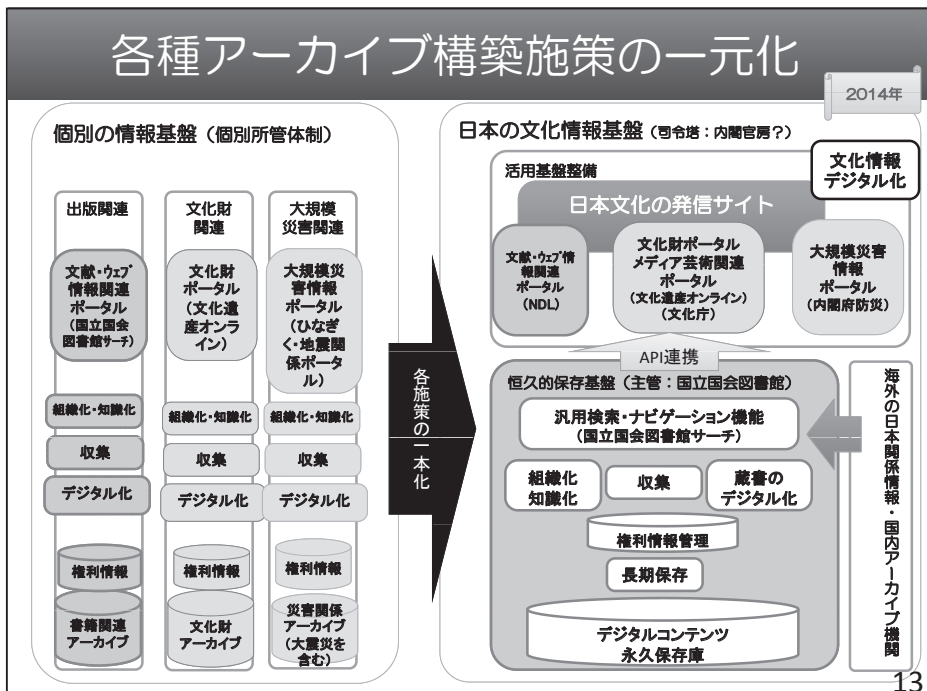
ナショナル・アーカイブとして、恒久的保存基盤、それから発信基盤、活用基盤をあえて分ける。それから知識創造基盤のところは、知識を実際に創造する行為を支援するという。それぞれの情報に対してちゃんとメタデータをつける、それらのコンテンツが利用しやすいように細かく組織化して構造化していく、それらに関連づけるための辞書に相当する典拠、関連づけとしてシソーラスを作成するという部分を、創造活動の支援と位置づけています。

元になるコンテンツ、恒久的保存基盤には、新たに作られたコンテンツも格納され、そしてそれが発信され、色々な目的で使われて、それがまた新たな知識として恒久的保



12

図5 電子書籍・文化財の各ナショナル・アーカイブ構想のカバレッジ



13

図6 各種アーカイブ構築施策の一元化

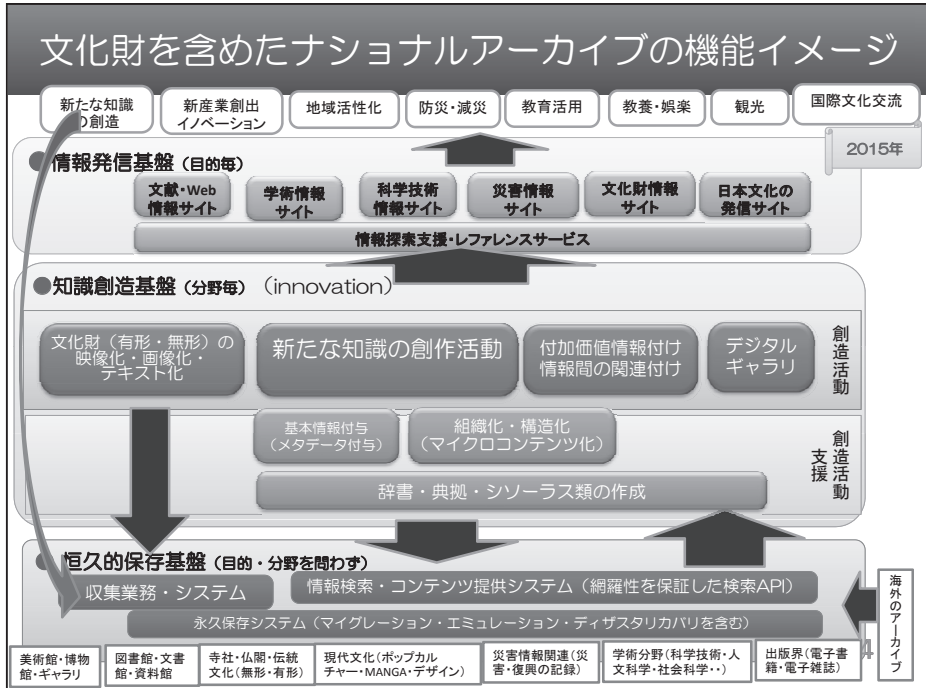


図7 文化財を含めたナショナル・アーカイブの機能イメージ

存基盤に蓄えられる。こういう循環をイメージしています。

### ナショナル・アーカイブで何をできるようにするか／何が変わるか

ナショナル・アーカイブを構築して何ができるか。まだナショナル・アーカイブはできていないですから、何をできるようにしたいのか、ということですが。情報を探し出す作業の効率化とその補助、情報を探し出すための作業の効率化、質の向上、そして新しい知識創造のコミュニティを創造する、そういう場になるのではないかと考え、それを目指したいと思っています。

これによって何が変わるかというと、今まで情報を探すためにかけていた時間を、より創造的な活動に振り分けられるようにする、ということが目標と考えています。

### これからの図書館、博物館、美術館等の機能

「見たことのない図書館」、これからの図書館等の機能については、壁のない図書館を作っていくということで、図書館の枠を超える、文献情報としての枠を超える、物理的な空間としては分野の異なる人たちが集まれる場となること、そして仮想の空間ではクラウドソーシングで、みんなで協力して知識創造を進められる、ということが必要だろうと考えております。

物理的な空間での発信というところでは、原本がなかなか見せられないようなものはデジタル化して提供することになるわけですが、その中でも特に貴重なものは、実際に閲覧できるような、博物館的な「ものを見せる」ところを考えています。

### これからの図書館員等に求められるもの

これもこれからの議論の材料として、これからの図書館員等に求められるものを考えてみると、利用者の情報探索支援の内容というのは、これからどんどん変化していく。より専門性の高い知識ノウハウが必要で、さらに組織化にあたっては、機械的な組織化が進むと、より高度な、機械にはできないようなスキルが必要になる。

デジタルコンテンツを扱うということ、そして利用者の IT スキル、リテラシーもこれからどんどん上がっていくことを想定すると、図書館はそれ以上のリテラシー、スキルを持つことが必要で、図書館員としては今まで明確にされていなかったシステムライブラリアンとか、そういう職種というものもこれから必要になるのではと思います。

### 「見たことのない図書館」の例：中国国家図書館と上海図書館

最後に付け加えて、昨年、中国に行ってきました。その中で訪れた中国国家図書館には、電子図書館のエクスペリエンスゾーン、未来の図書館サービスを体験する場が用意されています。NDL でも、こういった場を作りたいとリニューアル時に動いたのですが、当時は未来のことよりも現実のサービスの場が必要として、実現できませんでした。

それから中国国家図書館ではもう一つ、国家典籍博物館というものが昨年9月にオープンしています。図書館の真ん中に位置していて、図書館というよりまさに博物館です。博物館のスペースが図書館の中にある、現物を見たい人にそれを見られる、相当広い場が用意されています。

上海図書館も例として挙げておきます。上海図書館では2020年には従来の紙の資料と電子出版物が半々になると想定して、紙とデジタルがひとつのスペースであわせて閲覧できる、さらに利用については個人専用の静かな空間を作って、クリエイティブな作業ができる、イノベーションスペースという空間を、ワンフロアの半分くらいで作っています。上海図書館は2020年にはこのスペースを全館規模に広げたいとしています。

その他、電子書籍に関しては自分の持ち込んだタブレットにダウンロードして期間限定で閲覧できる仕組みとか、物理的な空間としては書店、喫茶もちゃんとあるとか、当館がやりたいと思ってもなかなかやれていないことが中国ではどんどん進んでいます。

佐藤：中山さん、ありがとうございました。それでは続いて井上さんから話題提供をいただきたいと思います。では井上さん、よろしくよろしくお願いいたします。

## 話題提供2 知識はここで目を覚ます なぜラーニング・コモンズを作ったのか



井上：皆さんこんにちは、同志社大学の井上です。

今日はこれからラーニング・コモンズに関わるお話をするのですが、長尾先生は図書館の役割として二つのことを挙げておられます。ひとつは書物の収集・保存・提供という機能、もうひとつは個人の思想等が出版という形にされた資料や作品をもとに

コミュニケーションをとって、アイデアが浮かび上がったときに適切な相手と議論する場所を提供する機能、という二つを挙げておられます。

最初の機能は中山さんがお話になったということで、私はアイデアをまとめていく、議論していくという視点から今後どういふかたちになっていくのかをお話します。

### 同志社大学良心館ラーニング・コモンズの紹介

会場にはラーニング・コモンズのピンクのパンフレットを配布していますが、実はこのパンフレット、これまで6万3千部配布されています。色々な方が取りにこられている。去年は見学者・視察者あわせて6,400人が訪ねてこられていて、今年は今のペースでいくと10,000人になってしまうのではないかという状況であります。

今皆さんがいるこの良心館という建物、これは基本的に教室棟なのですが、教室がいっぱい入っているそのど真ん中に、学習空間としてラーニング・コモンズが入れてある。図書館もこの学習空間に出てきていただいて、学生に対して色々な指導をしてもらったら、学生が大変創造的な活動ができるようになるのではないかな、ということで作っているものです。

朝9時から夜10時まで開室していて、6～7月はもう夜10時前まで利用者でパンパンです。夏の学生懸賞論文大会に申し込む、あるいは政策コンテストに出て行くという人たちでいっぱいなのです。まだ内部を見ていただいている方がいらっしやるといけませんので、図書館がセミナーで作ってくれたラーニング・コモンズ紹介ビデオを見ていただきましょう（紹介動画を再生）。

この動画は、図書館主催でラーニング・コモンズにおいて開催されたセミナーで作られた成果物で、ラーニング・コモンズが好きな人が集まってその紹介ビデオを作るというのが到達点でした。参加した学生がグループに分かれ、ラーニング・コモンズで気に入っているところを、全部撮ってくれています。このような動画を、セミナーに集まって初めて知り合い、協同作業をして90分後にはできあがるという、知的創造空間を作ったわけでありませう。

### ラーニング・コモンズの設置理由：ロジスティクスから学びの認知メカニズムへ

どうしてラーニング・コモンズを設置したのかといいますと、これは私自身の私見であります、図書館で色々仕事をしてきて、やっぱり図書館は情報源を貸し出したり、配信したり、あるいは契約したデータベースにアクセスできますよというところでいつも終わりがちだった。そうじゃなくて、届いた本、雑誌、ILL で取り寄せた文献のコピー、アクセスしたデータベース、「それを使ってあなたは一体何ができたのでしょうか」という点がいつも気懸かりだったわけです。そこで情報リテラシー教育にもっと力を入れないといけないなと思っていたのですが、それはある意味、大学の学習支援にあたってはいる。今まで図書館は物を貸し出したりとか、アクセスを保障したりとか、どちらかというところの情報源の流通やロジスティクスの方に目がいていたという印象がありますが、「それだけではだめだろう」と。実際に情報が届いた後、それを使って、どうやったら学生さんの認知や思考が活性化して、具体的な学習成果を生みだしていけるのかと考えた時に、やはり一番知識が覚えられる、覚えた知識を具体的に実践し移せるようになる勉強の仕方はアクティブラーニングだと、国の中教審の方針でも言われております。そうしたアクティブラーニングが展開できる、リサーチやディスカッションの実践が覚えられる練習ができるエリアを作りましょうということで、ラーニング・コモンズのスペースを作ることを提案しました。

復習しますと、図書館はリポジトリで発信するとか、データベースのアクセスを保障するとかいう、私から言わせるといつもロジスティクスの視点である。これは大事なことです、実際届いた、得た情報で何をしているのかというと、皆さん頭の中で「これを使えばこうできるのでは」、「これとこれはこう関係しているのか」と、一生懸命考えて悩んでいるのです。長尾先生がいつもおっしゃる、情報学的に「わかる」というのが、人間の頭の中でどうなっているか私はいつも気になっています。情報を得たら、頭の中の今まで知っていた知識に結びつけて、情報に自分なりの意味づけをして頭の中のインデックスを作り直す、あるいはスキームを作り直すということが、みなさんが実際に「学んでいる」ということなんですね。それを他者と一緒にやっていくことが最も教育効果があるのだというのが、認知科学や学習科学でいつも言われていることなのです。

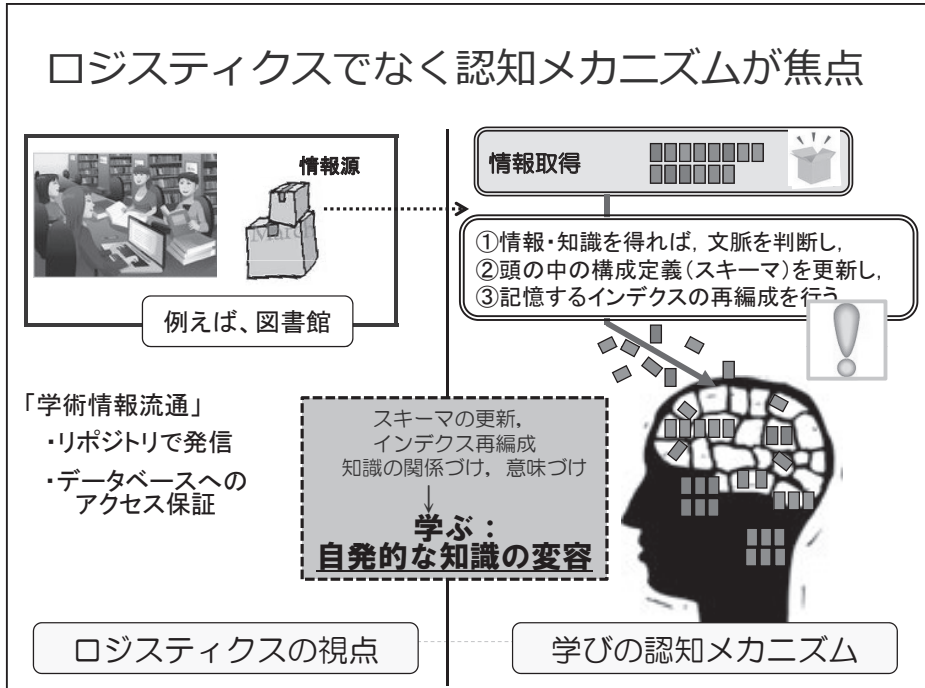


図8 ロジスティクスではなく認知メカニズムが焦点

### 学びの具体例（1）

これだけでは抽象論でわかりにくいですが、例えば、明治から昭和にかけて竹林熊彦という同志社出身の大変偉い図書館学者がいました。彼がもし生きていたら、図書館情報学コースができたと聞いたら喜ぶと思いますよ。その竹林熊彦、戦前に7人しかいない、旧帝国大学の司書官をしていた人です。その竹林熊彦を研究している先生がおられて、「お墓を探している」と言われました。私は同志社の近くの墓地にあるのを既に調べていましたので、「どうぞ来てください」とお連れしたことがあります。「こんな広い霊園で、竹林という苗字は複数あるのに、どうしてあなたはこれと見つけれられたのですか？」と不思議そうに尋ねられた。初めて探しにいった時は私も焦りましたが、環境とインタラクティブに学ぶことを実践すれば難しくありません。

まず竹林という墓を見つめますが、これは「竹林家之墓」としか書いていないので、それで当たっているかはわからない。でもじっとお墓を見ていて、亡くなった方は戒名をもらいますが、生きていた時の名前から戒名に一字もらうよな、と考えた。そこでお墓の後ろに挿してある卒塔婆を一本ずつ、「熊」という字が戒名についているものがないか調べたんです。そうしたら見つかったわけですね。見つけたところで、和尚さんが歩いて来られて、「竹林熊彦さんの墓はこれですか」と聞くと「そうですが、この人を知っている人が今頃来るなんて」と言われました。これによって、私の頭の中には「亡くなっ

た方と生きていたときのつなぎはどうしたら良いのか」という知識のインデクスがつくられたわけです。

こう考えると、データベースでもそうなのですが、皆さんがいつも使っている百科事典データベースでも、全文検索することによって、例えば樋口一葉が色々なものをつながっていることがわかる。井原西鶴や井上ひさしとつながっているなど、全文検索で探してみるとわかってくるわけですね。そうやってわかってきた事実を、どんどん分析していく。他の事典でも、樋口一葉がどんな項目で出てくるか見ていく、結核で亡くなったとか、特別の原稿用紙を使っていたとか、本郷に住んでいたんだとかということがわかるわけです。

そうやって集めていった情報をきちっと整理してやる、例えばマインドマップに直したりして頭の整理をしていくと、「このへんでテーマを絞ってレポートを書けるのではないか」、「このへんで研究できるんじゃないか」と見えてくるものがある。情報はこんな風に、使って、次にどう展開していくかを考えていないといけない、ということだと私は思っているのです。

### 同志社大学ラーニング・コモنزの概要

ラーニング・コモنزは、パンフレットにあります通り、知的欲望開発空間にしたいと考え、それをコンセプトにしています。大きさは2,550平米で、日本では単独ではおそらく最大級であろうと思っています。

最も重要視したのが「他者の学びの行為が『情報』になる空間」にする、ということです。フレキシビリティに溢れている空間にしたいということで、壁は一切入れていないし、かなり長時間滞在しても疲れないようにしてあるんですが、一番大事なのはここなんです。図書館の方々は情報というと論文であったり本であったり、パッケージになっているものだと思っておられる。ところが、創造的な活動に焦点をあてると、「学んでいる」活動・行為そのものが情報だと捉えた方がいいわけです。現れては消えいく情報ですよね。そういう情報がたくさんその空間にあって、「ああ、マインドマップはあのように書くのか」、「コンセプトマップの図にするとわかりやすい」とか、「ブレインストーミングってああいうふうにするのね」ということが、そこに滞在している人にお互いに見える、ということが一番重要なのではないかと。学習の行為そのものを情報として捉えたいと思っておりました。

行為が大事なのだったら、よい学習行為が溢れているコミュニティを作っていくと、行為は伝染していかない。そのためにどうしたらいいかということで、人的支援のサポートをたくさん配しています。まず専属の教員を雇っております。今日、会場にも来ておられますよね、うちの専属教員の一人であります、岡部先生です（岡部先生が会



場内で起立、挨拶される)。学生さんはこの顔を見たら学習相談に行くようにしたらいいかと思います。岡部先生、ありがとうございました。

今のようなことを推進していこうと思いますと、図書館だけではなかなか荷が重いと思ひまして、じゃあ複数の組織が連携してやりましょう、としています。ただし、一番の中心は学習支援・教育開発センターという、教育改善を担当している部署が管理・運営することになりました。そして、図書館からはエンベデッドライブラリアン、勉強している現場に出てきてもらって、その中で教えてもらう形にしようということで、情報探索アシスタントの方が出て来ております。あとは留学生の相手をするために国際センターから留学コーディネーターが、機器類の利用をサポートをするために IT サポートセンターからもスタッフに来てもらっている、という組み合わせになっております。

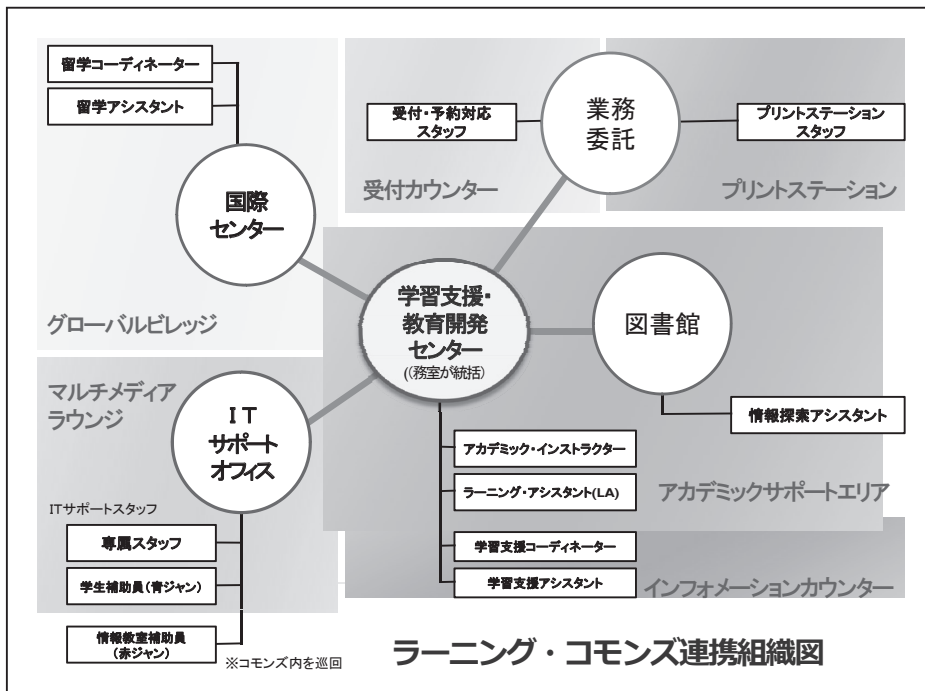


図9 ラーニング・コモンズ連携組織

まとめとして言いますと「色々な情報がすぐ手に入るという状況になっている、それをうまく使って、新しいものを創造していくような、共有空間を作っていきましょうよ」ということなのです。一番大事なのは、先ほど言いました、考えるという行為はなかなか見えない、人が何を読んでいるか頭の中は見えない、それをどうやって可視化して、みんなで思考過程を共有していったらいいのかと考えたときに、白いホワイトボードや、モニターを配することが効果を生むと思ったわけです。

ここで覚えていただきたいのですが、学習科学という言葉が十数年前からできております。その学習科学の成果として、「最もよい学習とはどういう学習か」について1つの回答がでています。最もよい学習とは、自分の頭の中でまだあやふやな段階の思考過程を外化、明示化する、要するに「何がわからないか、わからない」という段階で考えていることをいっぱい書き出して、それを自分で省察して、これは振り返りの作業と言われるのですが、これを同時に、常にやっていることが、最も頭に入りやすく覚えやすい状況にある、としています。自分が気がついたことをすぐ書けるといって、ホワイトボードでもいいし、パソコンでもいいし、モニターでもいいし、そういう環境を作って提供しているということなんです。

また、図書館の情報リテラシー教育でやってきた以上色々なこと、アイデアの拡張法とか、学術文献の読み方、グループでのアイデア出し、レポート構成の立て方、こうしたことについて、先ほど立っていただいた先生方を中心に、大学院生で学生のサポートをしてくれるラーニングアシスタントという人たちとともに、実行しているわけです。発表のリハーサルに付き合ったり、学習相談をチームティーチングで行ったり。京都大学で発表するという大学院生が、その前に話を聞いてみてほしいと来たこともあります。色々な人から意見をもらって、手直しをしていくと、やはり自信をもって発表できるし、よりよい構成のスライドができるわけです。また、サポートをしてくれている大学院生がどの曜日・時間帯に詰めているか、専門は何かといったことをデジタルサイネージで流し、どんな相談があったかはアーカイブ化してくれています。このサポートの人たちを対象に、日本協同教育学会の会長さんに来てもらって、学習相談への対応の仕方も研修してもらっています。今日、この会場におられる方で、こういう相談サービスを自分でもやってみたいと思う方がいれば、ぜひ応募していただけたらと思います。

(図10を表示しながら) これは原田先生と佐藤先生もお手伝いされた、私どものセンター所長である山田礼子先生のアンケート調査の結果です。ラーニング・コモンズを利用している人がどれくらいの学習効果が出ているかということを示したもので、週に3～4回以上来ている人は履修科目について、授業外での学習時間が増加したという人が当然、多いです、グループで学習する時間が増加したという人も多いです。効果が出ていることがわかります。

(図11を表示しながら) 先生方とか大学院生に相談に申し来たことがあるという人、論文や本や資料の探し方を相談に申し来たことがあるという人は、授業外での学習時間が増加していますし、それ以外にも増加傾向が見られます。この調査は仮調査としてやりましたが、現在、今出川校地にある全学部で、改めてアンケートを実施しているところです。

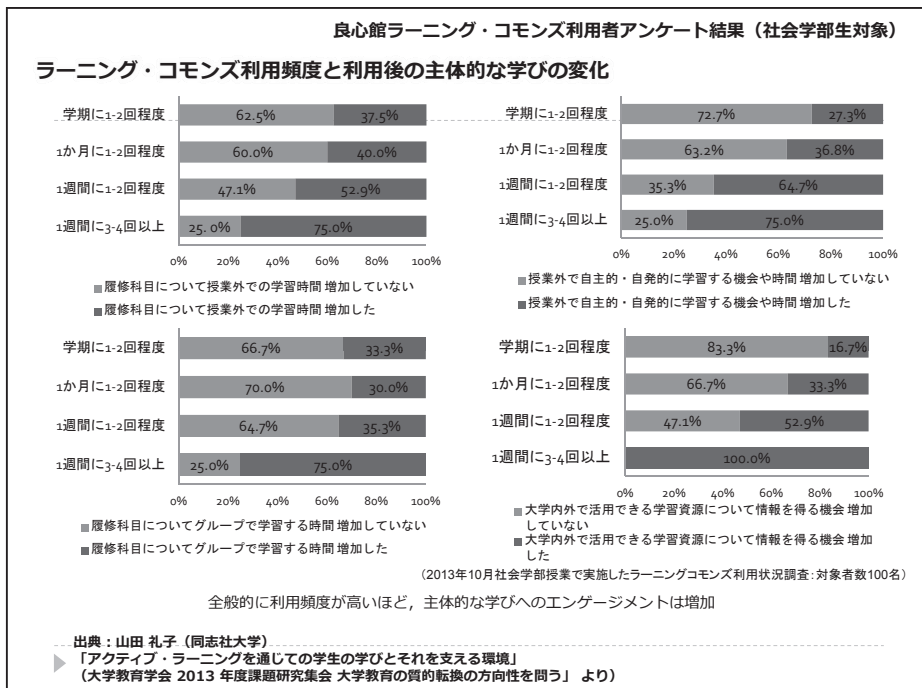


図10 良心館ラーニング・コモンズ利用者アンケート結果（1）

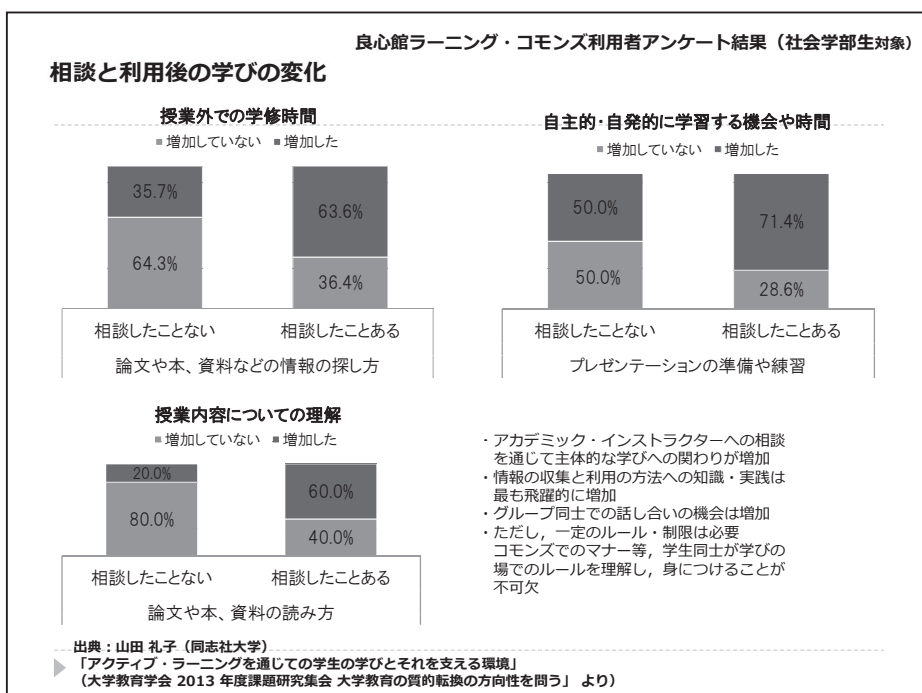


図11 良心館ラーニング・コモンズ利用者アンケート結果（2）

私どもとしましては、情報が簡単に手に入る時代に、どうすればそれらを使ってより効果的な知的生産ができるのか、それにはどのような学習環境が必要で、どんな学びの技術的サポートが求められるのかを考えて、昨年度、それを形にした、ということであります。

## 学びの具体例（2）

例えば、同志社大学の継続教育論という科目で、日本のプロフェッショナルスクール、専門職大学院のことを研究する機会があります。そういうことをやろうと思ったら、これは国政上で問題になっていますので、NDLサーチを使って、「専門職大学院」と入れると、連想キーワードいっぱい出てきてくれて、「社会人の学び直しの動向」とか、「法科大学院の発足一残された問題点と課題」というようなNDLの灰色文献が出てきます。これは国会議員さん向けに、ポストに入れられている、NDLの調査及び立法考査局がお作りになっているISSUE BRIEFという刊行物で、以前は全く読めなかったですよ。ネット上に公開されて、ようやく誰でも手にとれるようになっていきます。

この間探しましたらまた10年ぶりに、「法科大学院の現状と課題」というNDLの刊行文献が出ていまして、これらを使って、法科大学院に新たに増えた課題とはどういうものなのかとか、10年前から言われているけど今も解決されていない課題とは何なのか、といったことを調べながらレポートを組み立てていけば、基本的な調査はウェブ上でできる、ということです。これもNDLのおかげだと私は思っています。今日、会場には私の受け持ちクラスの人もあると思うんですけども、私が課した1月末のレポート、今紹介した文献でかなり書けるはずですよ。

## まとめ

図書館というのは保存場所、提供場所でもあるけれども、電子図書館機能が発達して、資料が閲覧できる中で、どうやったら色々な人と議論をしながら、実作業におとし込んで、新しいものを創造していけるのか。それを考える実験室として、ラーニング・コモンズのようなスペースを作ったということを申し上げまして、私の情報提供とさせていただきます。どうも御静聴ありがとうございました。

## ディスカッション



### 司会から：ここまでの整理

佐藤：改めまして中山さん、井上さん、ありがとうございました。

ここからディスカッションに入っていきたいと思います。

ここまで、長尾先生からは、先生が就任されてからのNDLが、  
どういう風に新たな方針を立てて、

どんな取り組みを実現されてきたかということをお話いただきました。

中山さんからは、20年間取り組んできた電子図書館、ナショナル・アーカイブというものの、これまで、現在、あるいはこれからについて話題提供いただきました。

井上さんからは、同志社大学のラーニング・コモンズという新たな取り組みについてご紹介いただきました。

これらはいずれも、それが初めて出てきたときには「おお、すごいものが出てきた」と捉えられるであろうもので、我々の考える「見たことのない図書館」というものはまさにこういうものだという、イメージに近いものです。ここまではそれをどう実現されたのかということについて、お三方にお話いただいたわけですが、まずはそこについてさらに突っ込んでお話を伺っていききたいと思います。

### 長尾前館長就任時、モットーと目標は如何に立てられたのか

佐藤：はじめに長尾先生に。「知識はわれらを豊かにする」という新たなモットーを立てられて、8つの目標を実現されてきたわけですが、その中でもあの新たなモットーは大きなインパクトを持っていたと思います。しかしNDL館長に就任されると決まっただけで、最初からあれが出てきたわけではないと思います。あのモットーと8つの目標が出てくるに至った背景というか、そこにつながるご経験やお考えには、どんなものがあったんでしょうか。

長尾：こういう裏話をするのはあまり好きじゃないんですけども、2007年の4月からNDLの館長になったんですけども、要請が来たのは2007年の2月の末頃だったんですね。

佐藤：かなりギリギリの時期ですね。

長尾：その年の3月の国会で館長人事が議決されたんですけれども、(館長就任の4月まで)考える余裕は1ヶ月しかなかったんです。

私は1994年から2、3年、京都大学附属図書館の電子図書館の実現というか、そういうことをやりました。1990年から電子図書館の研究をやっていたので、私がやりたい、作りたい電子図書館のイメージというのはかなり持っていた。しかし、京大で電子図書館のプロトタイプを作るのと、NDLという巨大な、膨大な資料を持つ図書館で作るというのは、根本的に違うわけです。規模が違う。やれることが違う。お金はない。そういう中でどうしていったらいいかということは1か月、相当真剣に考えました。

「知識はわれらを豊かにする」というのは、なんで考えたかということ、やはりNDLで自分が館長になるにあたっては、しっかりした理念というか、あるべき図書館の姿を自分はどう思っているかを、就任の時にはっきり言わなければいけないんじゃないかと思って。1ヶ月間考えていたら、3月末、就任の3～4日前に、夜中寝ている最中にはたと思い浮かんだんですね。「これだ」と思って、4月1日の就任時に、NDL職員の人々を講堂に集めて就任演説をした時に、この言葉と8つの目標をピシャッとみんなに言って。「私はこれで頑張りますから、皆さんもぜひよく理解して、頑張ってください」というなメッセージを送った。

佐藤：ということは、モットーと目標は図書館の方々と相談されて立てられたわけではなくて、長尾先生が以前から立てられていた。

長尾：ええ。全く相談しなかったですね。自分ひとりで考えました。

佐藤：中山さんは就任演説の場に実際にいらっしゃったんですか？

長尾：いたけど覚えてないんじゃないですか(笑)

中山：ちょうど私が関西館に赴任した時で、たぶん私移動中かどこかで、ごあいさつを聞いたんじゃないかな、と(笑)

佐藤：初めて新しいモットーと8つの目標が出てきた時、NDLの館内のみなさんの反応はどうでした？

中山：関西館に限って言えば、電子図書館事業を進めているところで、やろうとしていることと合致していましたし、好意的というか、きちっと受け入れられるモットーだっ

たと思います。

長尾：NDLは大艦巨砲主義というか、大きな船だから、ルーチンワークをしっかりとやっているということがミッションと思っている。確かに図書館は伝統を重んじて、従来のやり方をきっちり踏まえながらじわじわ新しくしていくことが大切です。だからドラステックなことをやるのは必ずしもよくないということは、私も認識はしているんですけども。それでも、60年間大きな船に乗ってゆっくりしてきた人の目を覚まさせるためには、しっかりした、クリアーなメッセージを送ることが必要だと思っていました。

世界の図書館状況、あるいは図書館だけではない、情報状況がものすごく変わっている中で、図書館というものがどうあるべきかということに、みんなが目覚ますというか、しっかりした認識を持って、前を向いて進んで行っていただくためには、モットーと目標の明示が必要だと思いました。

佐藤：その効果は大きかったというか、僕は2007年から卒業研究を始めた人間で、長尾先生が館長に就任されてからのNDLしか知らないということもあるのですが。NDLと言えば、大きな組織なのに新しい取り組みをどんどんやっていて、すごいなと思っていたのですが。実現していく中では、なかなか難しいところもあったのでは？

長尾：そうですね。大体NDLは200億円の予算規模です。最近だんだん減ってきて180億円ぐらいになっていると思いますけれども、そのうちの半分近くが人件費。それからコンピューターシステムとかなんとかかんとかのメンテナンス費用ということで、行ってみて私は腰を抜かしたんですけども、本を買うお金はたったの10億円しかない。外国の資料を買うお金がたったの10億円しかない。さらに、納本制度で本を納めてもらうときに、例えば1000円の本を納めてもらったら500円はフィードバックするというになっているんですね。それに必要な費用が大体5億円ありますが、いずれにしても本を買うお金はたったの10億円、他の資料を買うお金を入れても20億円足らずしかない。これはものすごいショックでしたね。

というのは、例えば京大でも、トータルでいうと毎年、本の購入に20億円は使っています。海外で言うと、アメリカのハーバード大学図書館なんかは年間に200億円ぐらい図書購入費、資料購入費を使っています。それに対して日本の最大の図書館がたったの10億円しか本を買うお金を持っていないというのは、日本が文化国家と称するにはあまりにも恥ずかしいと思いました。そういうこともあって、予算を取ることにもっと積極的に、努力しなきゃいかんということで、就任して2年目だったか、自民党の最後の政

権のときに補正予算があったので、「断固として電子図書館を作るための補正予算を取る」ということで、死に物狂いでがんばって、150億円を取りました。

### これからの電子図書館／ナショナル・アーカイブ構想

佐藤：150億円予算がついて、電子化が進んで行って、公衆送信等のサービスも進んでいるわけです。

そこで中山さんに話を振ると、中山さんが20年間取り組んできている電子図書館関連のプロジェクト構想についてご紹介いただいたわけですが、それらに一貫して変わっていないところとか、重視しているところ、逆に時代を経ることで変わってきたところというのは、長く見られてきてありましたか。

中山：なかなか難しいですが、デジタルコンテンツを扱う作業と、それらを作るシステムを効率化するというのを基本的な姿勢としてきているので。すべての局面において、如何にしたらルーチンワークとか、単純作業を、システムでできるようにするか。その分、人間の思考によって判断する、人間の思考が必要なところに、いかに時間をかけられるか。

探すということも、それなりに意義のあることですが、そうはいっても探すことは目的ではなく、その答えを見つけることが目的。その探すという行為に時間をとられず、いかに楽にすることができるかという。そこは今も変わっていないですね。

構想はずっとあっても実現できていないのは、長尾前館長がお話しされていたような、情報と情報を結びつける、情報をきちんと細分化して中身同士を結びつける、そこから芋づる式に検索できる、ということ。ずっと構想の中には入れ続けているんですが、現実に見えるシステムとしては成り立っていないところなんですね。

最近の動きとしてはオープンデータ、それからその Linked Open Data (LOD) 化の動きとかは、確実に進んできているところなので。今までできなかったように思われたところが、これからどんどんできるようになっていくのではないかなと思っています。

そういう意味では、狙っていることはずっと変わっていないですが、それがより現実に近づいてきているのかな、とは思っています。

佐藤：長尾先生のお話の最後にあった、時系列に基づいて構造化するとか、空間に基づいた構造化というのは、単純にこれとこれが関連するというだけじゃなくて、その関連性がどういうところにあるのかということを表示する、リンクを張るだけじゃなくてそのリンクの意味まで表現する必要がある。そういう意味ではセマンティックウェブとか、



LOD をさらに進めていく形に近いのかな、と思うのですが、その方向性はもともと持ってらっしゃって、そろそろそれを実現する環境が整ってきている、ということですか。環境、ないしは機運が。

中山：時空間のところでは、なかなか満足のいく形のところまでは行っていませんが、少なくとも東日本大震災関係の情報は、時間と空間での検索も導入している。ただ、それらの情報がデータとしてリンクされているかというところではなくて、文字列での検索に留まっているというところに問題があるところです。この辺は図書館ががんばるといよりは、情報工学的な技術が進んできているので、その研究成果を取り入れられるところまで今、来ていると思います。そういう技術がどんどん開発されるので、そういうシステムを図書館が導入して、かつその導入されたシステムを使っていくというのが、今後の図書館かなと思っております。

長尾：今の話に関連して。セマンティックウェブとか、色々なリンクを張るというのは、今までだったら人手でやってきたわけですね。だけどNDLとか、巨大な情報システムの場合、人手ではほとんど不可能ですから、これを自動的にできるようにしなきゃいかんのです。これに関しては、いわゆるコンピューターによる自然言語処理の技術というものをもっともっと研究開発することによって、かなりの程度できる、やればできるところまで来ていると私は思います。ですから、これから図書館学を探求なさる皆さん方には、ぜひ言語情報処理技術もちゃんと学んでいただきたいと思います。

それからもう一つだけ言いたいのは、図書館情報学と言っておりますけれども、それは「図書館を情報学的に整備する」という意味にとれるわけですが、それはちょっと話が狭すぎると私は思うんですね。そうじゃなくて、「情報図書館学」というのをこれから追究しないといけない。つまり、ウェブ情報とか、世の中に情報が山ほど流れてる、そういうものを図書館学的に整理して、使いやすくするためにはどうしたらいいかと、そういう学問、研究をやらなきゃいかん。だから、「図書館情報学」じゃなくて、「情報図書館学」をこれからやっていただきたいということを常々言っております。情報図書館学に関するカリキュラムとか、あるいは本のシリーズ、10巻ぐらいで「情報図書館学」のシリーズを作ろうじゃないかってなことをわーわー言ってるんですが、なかなか皆さんやろうとは言ってくれない（笑）

佐藤：そういう意味では、今まで図書館がやっていたようなことを、広く情報の領域に適用していくというのは良いかな、と思うのですが。ここで井上さん、このタイミングで話を振られるとは思わなかったかも知れませんが。

井上：いえいえ、大丈夫です。実はNDLのデジタル化資料の中には同志社大学所蔵の資料を提供して、デジタル化したコンテンツも含んでいます。全然絡んでいないなんてことはありません。

佐藤：井上さんから、今までの図書館はロジスティクスの部分に気を払いがちだったけれども、実際に情報を使っている場面にもかなり注目していかなければならないのでは、というお話がありました。

しかしロジスティクスの部分も、今お話にあったように、どんどん変化していく。今までは人が担当しなければいけなかったような部分まで、機械がやってくれる。きっとそのうち、卒塔婆を実際に見に行かなくてもちゃんと情報の関連付けが分かるような、どのお墓が誰のものか分かるようになってくれる気もするのですが。

そうすると、それを使う場面もどんどん変化していく。人が使える時間とカリソースも増えていくと思うのですが、その使い方、例えばラーニング・コモンズ紹介の動画を作るとか、そういう作る場面の支援が今後、大きなテーマになっていくのでしょうか。

井上：「AからBへ」という感じじゃなくて、「AとBが並行していく」という感じがあると思います。ロジスティクスと、実際に使う場面は並行している。使う方も、ある程度どういう風にデータベースが組まれていて、提供されているのかが分からないと、なかなか上手に使いこなせないでしょうね。

今のままでいくと、たぶん機械が Recommend してくれたら、それを丸呑みにする学生さんが増えていくのではないかと思います。そうではない、Recommend されたものから何を読み取っていくのか、ということが出来る学生さんを育てないといけない。大学の場合、そうした視点で育てないと非常に苦しいと考えています。情報をよく見て読める人からすれば、Recommend されている情報が必ずしも求める主題に当たっているわけではない、というのはあるわけです。便利になっていくにしても、それを読み取る技術を覚えていってもらわないといけないし、それをやるためには（ロジスティクスの）組み立て方についても、どういうアーキテクチャになっているのかという領域も勉強していかないと難しいのではないかな、と思っています。ですから、両方勉強しないとイケませんね。

佐藤：ちなみに、井上さんが「使う」場面に注目されるようになったのには何かきっかけがあったんですか？

井上：きっかけというか…私は、「特定の情報を探すために検索する」ということが、

昔からあまりなくて。新しいものがポンと出てきたら、「これを使って何できるか」という風に考えて、いつも情報を検索している人なんですよ。昔エリック・シュミットさんという Google の CEO（当時）が日本に来た時に、「Google は情報を探するための検索は意識していません」とはっきり宣言していました。「情報の意味が分かるための検索を私たちは一生懸命追求しているんです」と言っていたんですけども、これにちょっと似ているかな、と。新しい情報（源）が出てきた時に、「これを使って何ができるか」ということを一番最初に考えたい。NDL の事業で一番嬉しかったのは、近代デジタルライブラリー。それから、Google Earth が公開された時は、何よりも嬉しかった。僕は Google Earth を見た瞬間に、縮尺も付いているので、知人のお宅が、こういう広さで、近辺の環境はこうで、というのがわかる。さらに、この辺りの土地の地価は国土交通省の土地総合情報ライブラリーというサービスによればいくらくらいで、国税局のホームページを見れば相続税ってこれくらいなんだ、というのもわかる。Google Street View で、持っている車の車種までわかってしまう。善し悪しは別にして、3つか4つのサービスを検索すれば、色々なことがすぐ分かる。どうしてみんな、このように反応されないのかなと思います。

とにかく、情報を得たら、その情報を使っていったい何が作れるだろうかということ念頭に置いて見る。NDL が今公開しているものをいくつか使うだけでも、論文のテーマが100ぐらい書き出せるって感じでしょうか。それを、大学で学ぶ学生さんたちに伝えていきたいという想いが強い。その視点が僕は重要だと考えています。

ですから、後で出てくるかもしれませんが、図書館員に一番目指していただきたいのは、図書館という場所がなくなっても生きていける人。図書館という場所がなくても、誰かの中に入って行って、「この情報を使って、こうやれば、こうできるんだ」と展開できる、図書館という建物がなくても通用する図書館員が欲しい。そういう視点で見ると、NDL はすごい宝の山を出していただいていると思います。

ただ、NDL や国立公文書館が出している情報の中でも、いわゆるアーカイブ、記録史料の方のアーカイブ資料は、例えそれが翻刻してあっても、学生はなかなか使いづらいというのがありまして。そういう細かい情報利用の指導までは行きつけていないのが現状です。

長尾：今のお話、大変素晴らしかったと思います。図書館、特に NDL、あるいは大学図書館も含めて図書館という今までのシステムだけを考えるんじゃなくて、やっぱりオープンデータというか。国税庁のお話をされましたけども、国税庁だけじゃなくて経産省とか色々な省庁がものすごく色々なデータを持っているわけですね。そういうデータをできるだけ多く、広く、一般に公開できるようにしてもらおう。それができることによっ

て、色々な比較研究ができるし、今おっしゃったような深い研究ができて、物事の意味を多角的に調べることができるようになるんですね。ですから、これからは少なくとも国が持っているようなデータについてはオープンデータという形で、もっともっと積極的に公開してもらおう。我々も色々運動しているんですけど、皆さん方も、こういうことを言っていただくといいんじゃないかなと思います。

井上：今日、この会場は学生さんが多いから言いますけれども、皆さんの知らないところで、色々な関係の報告書類が、ネット上の見つけにくいところに、ヒョロっとPDFで張りつけてあったりします。一番印象的だったのが、北欧の、特にスウェーデンの中学校教師の給与について、行政でどう議論されているかを調べたいという相談があったときに、どの本を見ても、そんなことは載っていないという。そこで、そういう情報が欲しかったら、文科省がどこかに調査をさせていると予測して、「“文部科学省”“委託調査”を検索語にして、“filetype:pdf”で絞り込んで検索してみて」と言ったら、そのものズバリ、諸外国の教員給与に関する研究という、文科省が2年かけてやった研究報告がウェブに公開されていたりする。でもそれはただ、ウェブに置いてあるだけ。ああいうデータはきちんとメタデータを作ってもらって、NDLサーチにも引かかるようにしていただきたい。

「もっともっと開け」と長尾先生はおっしゃいますけれども、実は皆さんの気が付いてないところで、ボーンとウェブ上にあったりします。そういうものを活用してほしいし、それを活用するために、メタ・データ等で制御できるようにNDLには整備してほしいなという風に、要望を出していきたいと思います。

佐藤：確かに、既に公開されているデータはあったりしつつも、「分かっている人は探せるけれど…」という状態がまだ多かったり、あるいは分かっている人でも探せないこともある。あるいは翻刻されていても、古典籍であるとか、昔の文書類については、なかなか馴染みが無い、現代仮名遣いに慣れた人間には読みづらい。そういうところを補ってくれる、使いやすくしてくれるものをいろいろ、情報図書館学界には求めていきたいところではあると思います。

ナショナル・アーカイブ構想や図書館学が、そのロジスティクスの中に入れるものとして、「どういふものが重要なんじゃないか」というお考えがありますか？

中山：NDLサーチで今、検索できるデータベースは200ちょっとなんです。今まで入っていないデータベースは途方もない量があり、政府機関のデータベースでも入っていないものが山のようにある。今一般の、Google検索でも出てこないようなものもある。

NDLサーチでは基本的に、きちっとした機関がデータとして組織化してきたしてきたもの、作ってきたもの、それらを一つの環境で探せるようにしたい。能動的な情報、分野を越えた情報を使って、新しい情報が作られる創造基盤を作る必要がある。そういうことをやっていきたいと思っています。

長尾：私は色々な新しいことをやりましたが、第一は、日本中、例えば各省庁が色々な情報を持っているとか、あるいは公立図書館がどういう情報を持っているとか、そういうことをちゃんと知る事ができるようなポータルサイトを、NDLが一つの機能として持つ。つまりNDLの窓口にお問い合わせれば、こういった資料はどここの図書館にありますよとか、あるいは経産省のどういうデータベースを見ればありますよとか、そういう案内するようなポータルサイトをしっかり作るということの一つ、心がけました。

それからもう一つは、放っておけば消滅してしまうような情報をしっかり集めておくこと。例えば典型的なのは、テレビドラマとか、色々なものの台本とか、脚本とかは、テレビで放映されたら、捨てられてしまっておりました。だけど、ある小説から脚本が作られる、そういうときに脚本は小説にはない、ある種の情報や創造性を持っている資料であろうということで、残さなければいけない。脚本・台本を集める、ということで一生懸命運動しまして、今は結構集まっています。

それから、昭和30年ぐらいには10～15分ぐらいの科学映画がものすごくたくさん作られた。岩波映画とかありましたし、自然科学とか生物とか歴史とか、教育に役に立つ面白い映画がたくさん作られた。そういうものはほとんどが、現時点で忘却されている。どこに何があるか分からない。そういうものを丹念に集めて、例えば国立のフィルムセンターに納めるとか、フィルムセンターが無理であればNDLが集めるとか、そういう地道な努力をして、放っておけば無くなっていくような貴重な情報を集めていくというのが重要だということのでがんばりました。3、11の資料なんかもそれに類するものだと思います。

### これからの公共図書館への期待

佐藤：本日、会場には公共図書館や学校図書館関係の方もいらっしゃっています。ここでちょっと話題を変えて、これからの公共図書館にどんな役割を担って欲しい、という話をしていきたいと思います。特にNDLは今、デジタル化資料の送信サービス等で、公共図書館を一つのハブというか、サービスの窓口の役割を担う場になって欲しいと考えているところもあると思います。今後、国としてどのように情報を流通させるのか。どうやってネットワークを作っていくのか等、その方策について、今考えていることがあれば、伺いたいと思います。

長尾：私はNDLを離れて3年近くになりますから、現在の方針等はわかりませんが。

私が思う公共図書館の重要な役割は、やはりレファレンスサービス、相談業務だと思います。一般の方々は、図書館員に聞けば色々なことを教えてもらえるということすら、ほとんど知らない。図書館に行けば、書棚を見て読みたい本を自分で探す。けれども困っている方、「こういうこと知りたいんだけど、どうしたらいいかな」という課題を持ちながら図書館へ行くけれども、書棚を見てもどの本を読んだらいいかわからない人は、やっぱり結構おられるわけですね。そういう時に図書館員がきちっとしたレファレンスサービス、相談業務をやって差し上げるというのはものすごく大事だと思います。

しかし、そういうことにも限界がありますね。あらゆることに対する知識を持ってないとレファレンスサービスなんてきっちりできません。ですから、NDLのレファレンスサービスの人たちに対して私が言っておりましたのは、自分が分からなければ、他の図書館の司書の人に聞くとか、大学の先生方に聞く。ある専門分野に関しては、必ずその分野の優れた先生が何人かおられるから、そういう先生に聞くことによって、レファレンスサービスを、自信をもってお客さんに提供することができる。研究者ともっともっと色々な点で仲良くして、知り合いになって、そういう活動ができるようにしようじゃないかということを、ずいぶん言いました。スタンフォード大学の上級図書館員なんかは、スタンフォード大学の色々な教授と仲良しになっている人が山ほどおります。学生とか、色々な人が質問に来て、自分が答えられない場合は、そういう先生にバツと電話して、「こういう質問があったんですけど、どうですか」と聞くことができる。そういうように、広い世界を構築していくことが大事だと思いますね。

公共図書館の人たちも、レファレンスサービスを自分だけでやると、やれないことが山ほどあるわけですから、他の図書館の人たち、あるいはNDLの人たち、あるいは近隣の大学の先生方とかと、仲良しになって色々やれるようにする。

井上：私も実は、そうして欲しいなと思っていて。皆さん、レファレンスを何とか充実させたいと、非常に頑張っておられますが、やはり能力的にやり切れないところがあって、しぼんじゃっているところがあります。

先ほどのラーニング・コモンズで受け付ける学習相談も、資料以外の質問も含めての相談なので、結構幅広い。数人の先生がいて、それは図書館情報学を専門にする先生や、社会調査を専門にする先生だったり、教育学の先生だったりするわけですが、とにかく連携・協働して、相談に乗ってくれて言っているんですよね。

特に公共図書館はその地域の方、有識者の方で、お手伝いいただける方を上手く編成してもらえないかなという思いがいつもあります。それで地域の核になってもらいたい。大学には、論文を書いたりする場合に、どうしたらいいかわからないのときに訪ねる

場所としてライティングセンターというものがあります。同志社大学の新島襄が卒業したアーモスト大学に行きますと、ライティングセンターで質問すると、大学の人じゃなくて、近所の作家のおじさんが答えたりするんです。そういう人たちがお手伝いをして、色々な相談に乗るような人的な編成がされている。地域にもよると思うんですけどね、色々な展開の形があるようです。

長尾：もう一つ申し上げると、知識を持っている人たちと連携を取れるようにすることが一番大事なんですけれど、それができなくても、SNS を考えるんですね。つまり、一般の世界の人たちの中で、ある問題についての答えを持ってらっしゃる方は必ずどこかにいらっしゃる。だから、どうしてもわからない場合は、ネット上に質問を投げかける。すると色々な人たちから「それはこういうことで解決できる」とか、「それはこういうことだ」とか、情報が集まってくる。その中でどの情報が信用できるか、どういう情報をセレクトして答えを出すかというのはレファレンス、図書館司書の力量、責任ではあるわけですが、SNS をもっと活用することが、図書館活動の大きな要素として浮かび上がってきていると思います。図書館で答えられない問題でも日本中、世界中の人に聞けば誰かが知っている、答えてくれるということはあるので、SNS の活用をもっともっと考えたらいいんじゃないかと思いますね。

佐藤：その点では中山さんの発表スライドの中で、図書館が物理的な意味だけではなく仮想空間でも、共同作業の場となる、クラウドソーシングの可能性に触れられていました。あれは図書館の役割として新しいと思いましたが、今のお話にもつながりませんか？

中山：「公共図書館に何を求めるか」というところから話が進んでいると思いますが、やはりレファレンス業務、課題解決型図書館というのは、ずっと以前から文部科学省のレポートなどにもあるもので、今後ずっと狙っていくものと思います。

そのレファレンス、課題解決に当たっては、ある図書館でわかる範囲で、ということではなく、他の図書館、他の専門家、さらにはそれらが波及してクラウドソーシング、一般の人の知見も入れるというクラウドソーシングの話になっていく。要するに、何かの課題を解決しようとする時に、身近にいる人だけで解決しようとするのではなく、専門家も普通の人も含めて、それらの知識が蓄えられる仕組み、そしてそれを利用できる仕組みというのが必要んじゃないかと。例えば今、NDL がやっているレファレンス協同データベースは一つの方法であった。そこに知識を少しずつ入れていくわけですが、これがもっとどんどん発展していった形にならなければいけないと思うんですね。やはりレファレンスする人が何かできるというにはノウハウが必要、その人しか持って

ないノウハウがあって、それを使いたい。それがちゃんと形式化されてデータベースに入って、さらにデータベースが色々な形でつながる仕組みがあり、それを色々なところで活用できるような仕組みを作るとというのが、今後目指すところなのかなと。それはさほど遠くなくできる話だと思います。

### まとめに代えて：「見たことのない図書館」に必要な人材

佐藤：そろそろディスカッションの締めを考えなければならぬ時間に入ってしまいました。本当は3つ目のトピックとして、『見たことのない図書館』に必要な人材というお話をさせていただこうと思っていたのですが、もう時間がなくなってきました。

そこで、最後に皆さんから一言ずつ、コメントいただきたいと思っていたのですが、その一言をこのトピックになぞらえていただきたいと思います。冒頭で申した通り、これから同志社大学は大学院に図書館情報学コースを作ります。そこに入るか入らないかは別として、これから実際に、この先の図書館を担っていく人たちに、最後にもう一言ずつメッセージをいただきたいと思います。

では、中山さんからお願いします。

中山：やはり、機械的にできる部分が増えてくると、専門家はこれまで以上に高度なサービスをしていかなければならない。そういうサービスができるように、スキルを磨いていかなければならない。

今までの図書館の、従来型の調べ案内を延長して、これからの5～10年やっていけるとは、やはり思えない。今の技術、サービスの進展にあわせて、図書館員たちはそのサービスのもっと上のことをできるようにするというのを、もっと意識していかないといけないのではと思っています。

佐藤：ありがとうございます。では、井上さんからお願いします。

井上：ちょっと長くなるかもしれませんが。これからの図書館、未来の図書館ということでいうと、以前「これからの図書館」という連載を2年ほどしたことがあるんですが、ある人から「それは問題の立て方が間違っている。『図書館のこれから』としないといけない、図書館はなくなるんだから」と言われた。

佐藤：どうも、それを言ったのは知り合いのような気がします（笑）

井上：そこで本当に図書館がどうなるのかと考えたんですけども、長尾先生が以前、



情報図書館学について九州大学で講演されていたのを YouTube で見せていただいたことがあります。それが一番嬉しかったというか、「そうだよな」と感じ入った。

長尾先生は「図書館学的に」とおっしゃっていますが、私も昔、SE をやっていたことがあります。プログラムを開発する計算機の世界ではデータディクショナリとか、ソースライブラリというのがある。そこから「ライブラリ」というのは非常に広い言葉だと、20代の頃からずっと思っていたんです。そういう人間から見ると、情報図書館学というのは、まさにそうだよなあ、と実感します。

ただ、図書館には図書館の情報の分節の仕方（整理と索引化）があって、記録資料には記録資料の分節の仕方がある。それをどういう風に、上手くまとめていったらいいのかなというところが、今後の一番の課題であると思っています。

僕は「図書館」という言葉が死語になってもいいんじゃないか、という気持ちもありまして。ちょっとラーニング・コモンズの話に戻りますけれども、「ラーニング・コモンズのミッションは一体何なんだ」と講演に行って質問を受けることが多いんですが、私から言わせれば、ラーニング・コモンズが死語になった時が、ラーニング・コモンズがミッションを果たした時なんだ、と。先ほど、村田学長とお話したときに、学長もおっしゃっていましたが、ラーニング・コモンズなんて、あちこちにあればいい。いや、キャンパス全体がラーニング・コモンズになってなきゃいけないんだと。本当に、死語になった時こそが行き渡った時、なんですね。

皆さんが心配されているのは、図書館とか、あるいは美術館とかそういう特定のところに、過去には情報とか資料が偏在してあったんです。「偏る」という字ですね。ところがネットが出てきて、今度は百万遍の「遍」ですね、遍く存在するようになってしまった。それに対して図書館は「うちの情報の方がいいんです」と主張しているけれども、そうじゃなくて、図書館も遍在していったらいいんですよ。みんなのすぐそばにいる。

それはどういう形かという、やはり電子図書館という形だと思いますし、私は iPad 一個持ってたら、海外へ行っても NDL の情報を使って勉強していますし、「すぐそばに NDL があるんだ」って気持ちがある。20歳の時に雑誌記事索引というものを知ってから、ずっとそうなんです、気持ち的には。長尾先生は NDL との距離の問題に触れられていましたが、使っている側からすると、NDL は「いつも身近にいてくれる図書館」という意識が僕にはあります。

そんな風に遍在するために、遍くあるために、電子図書館化をもっと進めていったらいいんじゃないかなと考えています。

長尾：色々なお答えの仕方があると思うんですが、一つは今、井上さんがおっしゃったように、「ネットワーク上に存在する情報全体が図書館である」。「世界全体が一つの図

書館である」という観点から、探す技術を磨いていくこと。

それから、「探す」ということの意味を考えていくと、それは「大事な情報は何か」ということを判別する能力を養うことが必要だと思います。先ほど、どういう情報が大切なのか、捨てる技術をこれから考えないといけないということをお話ししましたが、膨大な情報の世界が、これからますます膨大になっていく。その中で何が大切なものであるかについての判断力を磨いていって、図書館司書としての能力を高めていくことが必要だと思います。

佐藤：皆さん、ありがとうございました。

ひしひしと「情報図書館学コース」にしておけば良かったのではないかと感じ始めているところなのですが（笑）

そう簡単には変えられないので、看板は今のままでいきますが、これから我々が図書館情報学コースを進めていく中で、お話にあったことをぜひ踏まえていきたいと思いません。

それでは、長時間にわたってパネリストの皆さん、ありがとうございました。

（文責：佐藤 翔）